

解 答

問1 1 雑誌 2 単純 3 迷 4 秒針 5 夢 6 背負 7 確 8 片手 9 加減
10 巻 11 謝 12 困 13 敵 14 否定 15 見捨

問2 それぞれに仲良しの子でかたまっておしゃべりをしている中で、みんなから仲間外れにされてひとりぼっちの直子に、明るく笑って話しかけるという行動。

問3 不登校だった直子が久しぶりに来たため、みんなで大騒ぎし、直子を特別扱いしたこと。

問4 オ 問5 ウ 問6 エ

問7 あとで後悔しないように無理な道はあきらめ、進むべき道をちゃんと選びなおすこと。

問8 周りに流され、確かな意志をもたない澄子。

問9 イ 問10 エ 問11 a ア b イ

問12 直子をひとりぼっちにしたせいで不登校にしてしまったことを謝ろうと勇気をふりしぶり、緊張している様子。

問13 クラスで孤立する直子を心配していたが、実は澄子の方が周りに流される意志の弱い子として冷静に見られていたこと、また、静かでおとなしい子としか見ていなかった直子が、実は親に強く反発し自分の意志をしっかり持った子だということに気づき、自分のうかつさ、人を見る力のなさが情けなかったから。

問14 イ・カ

解 説

出典は、草野たき「教室の祭り」。

まず、場面展開に沿って、主人公澄子の心情の移り変わりを整理してみます。

① 朝の教室

長らく不登校だった直子が現れた昨日は、クラスのみんなが彼女を囲んで声をかけた（教室の祭り）が、今日は普段どおりに戻った。澄子はてっちゃんたちのグループに属しながらも、ひとりぼっちでいる幼なじみの直子のことが気になって仕方ない。

② 帰宅して

グループに属しながらも、直子をひとりにしている自分の迷い・悩みを母親に相談する。すると、母は、どっちかを選んで、どっちかをあきらめる、それは逃げることではなく新しく選びなおすことであり、後悔することなく人生を送る上で大切な決断なのだと説く。そう言われて、澄子は直子と仲良くする方を選ぶ。

③ 直子の家へ向かいながら

五年生の今に至るまで、何をやっても中途半端で、意志が弱い自分を反省する。が、直子に会うために走り続ける意志をしっかり持ち続けようと、自らを叱咤する。

④ 公園での直子との語らい

直子をひとりぼっちにして不登校にさせるまで追いつめたことを思い切って謝罪する。が、直子はおかしそうに笑って言う。自分が不登校になったのは母親との気持ちのすれちがいと反発によるものであり、澄子のせいではない、と。かえって、私はひとりでも大丈夫だから、スミはグループ内にいたままの方がいいよ、と諭して、さっさと帰宅する。澄子はその後ろ姿を見ながら、見捨てられていたのは自分の方であり、グループに引き込まれていく意志の弱い自分のことを直子はしっかりと見ていたのだと知って、落ち込むばかりだった。

問2 直前の4行分に注目します。「それぞれに仲良しの子でかたまって、おしゃべりしている」ときに「良かった、直子が学校にきてくれて。私、うれしいよ」と話しかけるという行動です。

問3 不登校だった直子が久しぶりに現れた昨日の教室内の様子を「お祭り」にたとえています。文中の言葉をかき集めましょう。「みんなで直子を囲んだり」、「直子を特別あつかいする」などの表現を利用しつつ、「お祭り」を言い始めた言葉として「大騒ぎ」や「にぎやかに」などを含めましょう。

問4 「そうして過ぎた長い一日」（3ページ）が指す内容に気をつけます。誰からも話しかけられずに教室にひとりぼ

っちでいる「直子の様子をただ見ていることしかできなかった」自分の「情けない気持ち」を、身近な人に話さないではいられなかったのです。

問5 澄子は、今日の教室の様子だけでなく、今まで内緒にしてきた直子との関係やクラスメートたちの対応を全部打ち明けます。それに耳をかたむける母親の様子は「途中で口をはさむことなく、しづかに、まじめに」聞き、直子とてっちゃんグループのどちらを選ぶのかを「容赦なくつっこむ」厳しい口調のものでした。

問6 お母さんが娘に真剣に伝えようとしているのは、どういうことでしょうか。人は成長するにしたがって、どちらかを選ばなければならない場面に幾度か出会う。そのときに大切なのは、どちらかを選び、片方をあきらめる、しなわち後悔しないためによく考えて選びなおすことだと説きます。お母さんは澄子に、そのどちらを選べと強要しているのではありません。澄子自身がよく考え、ちゃんと選びなおしてほしいと願っているのです。

問7 (4~6ページ) でのお母さんの会話に注目します。会話中の適当な言葉を書き集めます。「どっちかを選んで、どっちかをあきらめなきやいけない」、「あきらめることは、よく考えて選びなおすことよ」、「中途半端な気持ちのまま進んだら、きっと後悔する」などを使いましょう。

問8 ——線⑦の言葉は「舵のない」と「小さなボート」に分けられます。それぞれをわかりやすい言葉に言いかえます。前者は直前の「お母さんに、てっちゃんやカコに、クラスの女子のムードに、流されてるだけの」をヒントにすると、周りの人たちの言葉やふるまいに左右されているだけで、自分自身のしっかりした意志が欠けているという内容になります。また、後者の「小さなボート」は、心が揺れ動く澄子自身を表しています。

問9 直前のないように注目します。「もう、歩いてもいいかな」と中途でやめてしまう自分に「自分で×印をつける」とあります。つまり弱気で、いい加減で、意志が弱い、今までの自分を厳しく打ちすえ、叱咤し、なんとか最後までは走り続けさせようと励ましているのです。

問10 「ぎゅうぎゅうと心の奥におしこめ」たいのは、自分自身のどういう「気持ち」でしょうか。(問9)で見たような、いい加減で、意志のもろい気持ちです。それは、自分で選んだ行動なのに、いざとなるとためらい、尻込みしてしまう気持ちであり、「逃げだしたい」と感じてしまう消極的な気持ちです。

問11 辞書的には、a「お愛想をふりまく」=「人に好感を持たれる言葉遣いやふるまいをする」、b「あぜんとする」=「予想もしなかった事態に驚きあきれて、ものも言えない」という意味です。設問文に「ここでの意味として」とありますから、場面情景を思い浮かべて、適切なものを選びます。

問12 前後数行分をよく読んで、適切な言葉に注目しましょう。「おもいきって言葉を出」そうとする(=勇気をふりしめる、言おうと決心したことをしっかり言う、など)。また、「私、謝りたくて……」。何を? 直子をひとりぼっちに」したことを、です。さらに、「緊張しすぎて、うまく言葉がつづかない」という部分も利用しましょう。

問13 設問文に「本文全体の内容をふまえて」とあります。すでに(問2、4、8、9、10、12)で見たように、澄子は、てっちゃんグループと直子のどちらを選ぶか迷った末に、直子の方を選び直します。なぜなら、幼なじみで、本心から好感を持っていたのは直子の方だからという理由と共に、直子を今までひとりぼっちにしておいたため不登校にまで至らせてしまったからという負い目を感じているからです。しかし、直子の家を訪ねて、久しぶりに会話をし、~~~線a「あぜんとした」辺りから、澄子の思っても見なかった驚きの言葉を直子は言い始めます。不登校になったのは澄子の態度とは何の関係もないこと、私はひとりでも平気だから澄子はてっちゃんグループにいた方が澄子にとって良いだろうということ、です。これら直子の言葉を耳に入れている間(12ページ)の澄子の内面の動きに注意します。「見たことのない直子の強い口調に、澄子はあぜんとするばかりだった」→「私はいったい直子の何を見ていたのだろう、と澄子は思う」→「直子は、しづかでおとなしい子としか見ていないかった」「そんな、親に強く反発するような子だったなんて、想像もしなかった」→「なんて、まぬけなのだろうと自分がイヤになる」……そう気づいた結果、「自分にがっかりした」=「落ちこむばかりだった」のです。このかんの澄子の心情を順にまとめましょう。

問14 イ→「澄子の強さ」が× カ→「描いてる」などの「ややくだけた表現」は、地の文(会話以外の文)にはありませんから、×